HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	札幌市域の開拓に貢献した企業家に関する覚え書き ：札幌市厚別区は８名の企業家たちの開墾によって始まった
著者	黒田，重雄；KURODA，Shigeo
引用	開発論集(90)：115-140
発行日	2012-09-28

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

開発論集　第90号　115-140(2012年９月)

札幌市域の開拓に貢献した企業家に関する覚え書き
―札幌市厚別区は８名の企業家たちの開墾によって始まった―

黒　田　重　雄*

目　次

はじめに
Ⅰ．札幌市厚別区とはどういうところか
Ⅱ．北海道の開拓はどう行われようとしていたのか
Ⅲ．信州信濃では北海道開拓をどうみていたか。
Ⅳ．上諏訪とはどういうところであったのか
Ⅴ．厚別へ，なぜ８名の開拓者たちは入植したのか
Ⅵ．厚別を，彼らはどう開拓したか
おわりに（これからの厚別のまちづくりを考える）

注と参考文献

はじめに

北海道開拓の３本柱といえば，開拓使，屯田兵，開拓会社ということになろうか。そして，彼らによって北海道のパイオニア精神は生まれたのだという説が一般的である。

ここに，NHK 世論調査所がまとめた『日本人の県民性』(1980 年)という調査報告書がある。それによると，47 都道府県の比較で浮き彫りにされた「北海道人の特性」が４点にまとめられている。すなわち，

①しがらみがない，②宗教心がない，③男女平等意識が強い，④競争心がない。

であり，全体として自他共に認める「おおらかさ」の気質である，とされている。

われわれも，この分析結果にはつい納得してしまう。つまり，厳寒の荒々しい原野を切り開くには，出身地のこだわりを捨て，人を押しのける心根を捨て(競争心があってはだめ)，皆分け隔てなく老若男女一致団結する，つまり多くの人々の協力があってこその北海道開拓であったに違いない。したがって，それらの伝統を「どさんこ気質」として子孫たちは受け継いでいるはずだ，と日頃考えていることと一致するものがあるからである。

この「どさんこ気質」は，開拓魂の代名詞として時に「パイオニア精神」と呼ばれ，新しいものに挑戦するときの精神的バックボーンとしても活用されている(1)。

一方で筆者は，当初は札幌市域の開拓や開発も中央区や琴似，白石などほぼ全域にわたって

*（くろだ　しげお）北海学園大学開発研究所特別研究員（元北海学園大学教授，北大名誉教授）

開拓使の計画に沿った屯田兵や開拓社の募集に応募した人たちにによって行われてきたと考えていた。

要するに，われわれの頭の中では，単独での開拓などはできなかったと考えているということである。つまり，個人で北海道くんだりまで開拓にやってきて成功した人がいることは端(はな)から捨ててしまっている感があったということである。

実際はどうだったのか。確かに，多くの人々の協力は必要であったろうが，その開拓に協力する人は開拓者たちその人でなくてもよいのである。たとえば，資金力さえあれば，多数の人夫を雇うこともできたはずだからである。

考えてみれば当然のことであるが，開拓・開墾といえども結局は個々人の力が前提ということである。実際に調べていくうちに，札幌でも宗教心や競争心もあり，しかも独立進取の気性に溢れた個人が開拓に携わっていたし，そうした個人の創意工夫によって大きく開拓されていったところが存在していることが分かってきている。

特に，寒冷地のため屯田兵にも禁止されていたが，後にその重要性に鑑みて明治 20 年代入って解禁された米作を，明治 10 年代初めに札幌で初めて成功させたと考えられるのは，これら個人の開拓者たちであった。

こうしたことから，筆者としては，「北海道という鬱蒼たる原野（の開拓）は，今日いうところの「常に新しいことに挑戦する〝企業家精神〞（アンテルプルナールシップ）に満ちた人々の活躍場」として見る観点が，これまでは，やや欠落していたのではないかと考えるようになっている。

そうした企業家的成功者の典型例が上諏訪（現長野県諏訪市）出身の上島　正という人物であり，彼が連れてきて厚別地域（現札幌市厚別区）で開拓に携わった人たちなのである(2)(3)。

もともと厚別地域にはアイヌの人たちが狩猟・採集の生活していたところであるが，鬱蒼たる原始林が続き，しかも泥炭の地であり，とても開拓者が入植して耕作するには適さないところであった。

それが，明治 16 年に上諏訪からやってきた 8 名（とその家族）の人たちによって開墾されたのであった。彼らは単身と家族持ちの両方ではあったが，屯田兵（または，兵役を終えた人たち）でもなく，開拓社の求めに応じたのでもなく，そして故郷では特に貧しかったわけでもなく，単純に自己の意志という形で来ている。しかも，畑作や酪農でもなく，申し合わせたように一斉に稲作（米作り）を始めているのである。

さらにまた，成功した彼らからは，稲作に関して江別に入った屯田兵にも助けの手も差し伸べるものも出ていたという(4)。

（因みに，厚別区に隣接する白石区は，屯田兵制が敷かれ明治 8 年入植が始まる前の明治 4 年に仙台藩白石領の藩士による開拓がはじまりといわれている。彼らは，北海道開拓使貫族（北海道開拓使に所属し，武士の身分を失わずに北海道の防備と開拓に従事するの意）であったから，厚別の開拓者たちとは，そもそも身分が違っている。）

われわれは，こんなところにどうして信州信濃の上諏訪からいっぺんに8名もの人たちが，それぞれ独立に開拓にやってきて米づくりを始めたのか。厚別地域が今日あるのは彼らの苦闘の日々があったればこそと感じるのではあるが，そこのところの不可思議の一端を考察してみようというのが拙論の意図である。

【拙論における「あらかじめ」の注記】

「なぜ厚別に入植したのか」というテーマについては，確たる説明はできないというのが本当のところである。入植後の厚別の発展については，一部を除いてかなり分かっているが，入植前や入植時のことについては未だ解明されていない部分や事柄が少なからずあるというところからきている。最大の原因は，歴史の解明には欠かせない明治維新前後の戸籍謄本など原資料に相当する部分が手に入らないことにある。そのため，出典の不明確な資料からの引用や口伝えといったものに頼らざるを得ないというのが現状である。

したがって，本文の記述は，厚別中央歴史の会編『厚別　黎明期の群像―こうして札幌市厚別区の開拓は始まった―』(2012) の要約の形をとるものであるが[5]，章末にある「主な引用・参考文献」を出来る限り活用した筆者による個人的見解の部分が多々あることをあらかじめ断っておかねばならない。

Ⅰ．現在の札幌市厚別区は

⑴　厚別という名前の由来

「厚別中央地区」は，現在，厚別区に入っている旭町，上野幌，小野幌，大谷地，山本，川下など，いわゆる「厚別」といわれる地域における最初の開墾地である。そもそも「厚別」という名の由来は，アイヌ語では「ハスシペッ」とか「ハシ・ペッ」とかいって，「オヒョウニレの木の多い川」，「かん木の中を流れる川」の意味であるといわれているが，地名になったのは明治27年に鉄道の駅に「厚別駅」という駅名が付けられたときからとなっている。

⑵　入植の第一歩は明治16年（1883）

北海道が蝦夷地と呼ばれていた頃，北海道の各地にはすでにアイヌの人たちが住んでいて，川でサケやマスを捕ったり，小規模ながら農耕をして生活を営んでいた。

厚別の歴史を組解くと，もとより厚別にもアイヌの人たちは住んでいたが，後年，厚別開拓の礎として記されるのは，明治16年4月に長野県上諏訪出身の8名の人々による入植であるとなっている。(『あつべつ区　再考』によると，内訳は，長野県出身の河西由造，中澤兼三郎，花岡太吉，藤森弥惣治，金子藤重，百瀬松五郎，濱　源蔵，小飼清右衛門であった)[6]。

場所は，現在の厚別駅のそばで厚別川の両岸であった。そのころのことについては，『信濃小学校百周年記念誌』には，次のように書かれている[7]。

明治16年当時の厚別は，札幌の近くであるにもかかわらず，一戸の家も無く，従って，道も無く非常に難儀をしながらの入植であった。札幌からは，豊平川渡しで月寒へ入り，厚別川を辿って，さらに，放し馬の通り道である比較的乾燥地の草分け路を伝って，入植地へ入ってきたのである。

⑶　明治16年に厚別の開拓を始めた人々の入植地の位置関係

上諏訪方面から厚別にやって来て，明治16年に「土地下渡願」を受理された8人の名前，入植時の年齢，出身地，入植地は以下のようであった。

河西由造　　39歳，長野県上諏訪村岡村（現諏訪市），厚別北部
小飼清右衛門　65歳，長野県諏訪郡宮川村（現茅野市宮川），厚別北部
金子藤重　　35歳，長野県諏訪郡豊田村（現諏訪市），厚別北部
濱　源蔵　　58歳，長野県諏訪郡中州村（現諏訪市大字中州），厚別北部

以上，厚別北部

中澤兼三郎　　48歳，長野県諏訪郡湖南村（現諏訪市湖南），厚別南部
百瀬松五郎　　52歳，長野県上伊那郡三里村（現辰野町大字上島），厚別南部
花岡太吉　　36歳，長野県諏訪郡上諏訪村（現諏訪市），厚別南部
藤森弥惣治　　58歳，長野県諏訪郡湖南村（現諏訪市湖南），厚別南部

以上，厚別南部

⑷　ではなぜ，彼らがこのような難儀をしながら，厚別へ入植することになったのか

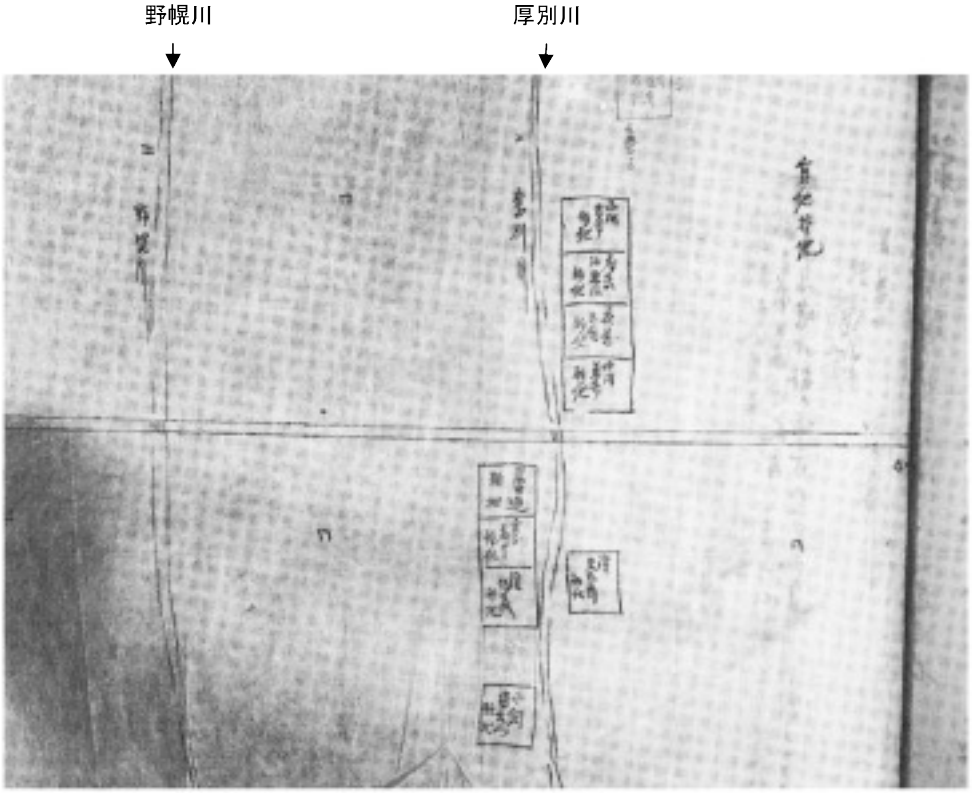
厚別関連史誌によれば，この地がここまで発展してきたのは，明治期に全国各地から数多くの人びとがやってきて開墾に携わり，彼らの悪戦苦闘の末のお陰であると書かれている。

確かに，厚別地域には，明治16年の長野県からの入植に始まり，その後明治30年代後半までに，青森県，岩手県，山形県，栃木県，福島県，新潟県，富山県，石川県，福井県，京都府，奈良県，山口県，香川県，福岡県，その他不詳などを含め，ほぼ全国津々浦々からやってきているのである。

ところで，厚別に最初に入植した彼らは，屯田兵として来たわけではなく，開拓会社の応募に応じてやってきたわけでもない。8人が夫々の自由意志であり，また，それぞれが強烈な個性と開拓者魂をもって未開の地北海道に渡って来ている。しかし，彼らの厚別入植は一部を除いて一家族ずつ夫々別々にやってきている。それがたまたま明治16年という年に重なったにすぎないようなのである。

彼らの北海道への入植動機は，巷で言われているような，食いぱぐれとか，悪いことをして逃亡の末路というものではない。それぞれ家庭の生活事情に違いはあるにしても，調べて行くにつれ，彼ら一人ひとりは，ある意味一旗挙げてやろうとか，一攫千金を夢見てやってきたとしか思えないような点が浮かびあがってくるのである。今風にいえばベンチャー・ビジネスを

8名の居住位置（鉄道を挟んで）（『あつべつ区再考 ―― 自然・ひと・歴史 ――』，p.44[6]）



▲今井政蔵の地所払下願に添付されている図面

【上部：南部側】

百瀬松五郎
藤森弥惣治
花岡太吉
中澤兼三郎

鉄道線路（函館本線）

【下部：北部側】

川西（河西）由造
金子藤重　濱文太郎
濱源蔵

小飼清右衛門

地でいくような開拓行動であったといっても過言ではないようなのである。

たとえば，厚別地域の開拓・発展に功労のあった人物といえば，かならず名前の挙がるのは，明治 16 年に入植した〝河西由造″である[8]。由造は，入植後，学校建設や神社建立などで中心的な役割を果たし，厚別地区における教育文化の発展の礎を築いた一人として名を残している。一つの疑問は，なぜ，彼は北海道にやってきたのか。また，なぜ厚別の地を開拓することになったのかである。

他の 7 名についても同様である。厚別発展の礎を築いた人びとにも，各人それなりの理由があってこの地に降り立ったに違いない。

ではどういう理由があったのか，彼らの厚別開拓にいたる経緯を考究してみたいというのがこの小論の目的でもある。

（ただし，8 名個々の入植の動機や経緯の詳細については，紙幅の関係もあり，出版された『厚別　黎明期の群像―こうして札幌市厚別区の開拓は始まった―』(2012)[5] に譲るとして，本論文では，それらにまつわる歴史的背景や事件環境の考察に限定している点に留意されたい。）

II．北海道の開拓はどう行われようとしていたのか

文献によると[9]，

> 北海道開拓の歴史は明治維新とほぼ同じ，明治 2 年（1869）札幌に北海道開拓使が設置されてからでした。当初明治政府は北海道の地勢，あるいは亜寒帯と言う気候から，北海道においては西洋式畑作の大規模農業を目指していました。「少年よ大志を抱け！」で有名なクラーク博士はそのために札幌農業学校に来ていたのです。
>
> 当時の日本は明治維新による混乱期で，官軍（朝廷側）でなかった藩はとりつぶされ，禄（「ろく」藩主から与えられていた土地やこめなどの武士の収入）を失った士族（武士）や貧しい農民達が社会不安のもとになっていました。そこで，明治政府は北方の防備と開拓という 2 つの使命を担った「屯田兵」（とんでんへい）を北海道に植民させることになりました。当時の屯田兵村の位置をみると北海道の政治の中心である札幌とロシア人が来港することの多かった根室付近の海岸部に集中していることが分かります。始めの頃の屯田兵は士族が多く，北海道を防備する要素が強かったといわれています。しかし，明治 24 年からは一般平民の入植も盛んになり，屯田兵の性格も開拓を中心としたものに変わってきました。

とある。

ところで，屯田兵には米は支給されていて，稲作を禁止していた。屯田兵が耕作していたのは，ひえ・粟・そば・麦・南瓜・唐きびなど寒い土地でも育つ穀物であった。屯田兵が米作の

禁を破ると罰則も設けられていた。

公的な形で稲作が始まるのはもっと後になってからのことである。すなわち，実質的な稲作のゴー・サインを出したのは，明治 25 年（1892）北海道庁の財務部長として着任した酒匂常明が，稲作試験場を作ったときからであり，そして明治 35 年（1902）に「北海道土功組合法」を発布し本格的な水田開発に乗り出したとされている。

一方，開拓使から，長野県へは開拓が命ぜられなかったことは，信濃の国の『満州開拓史　総論』に載せられている[10]。

> 16 世紀以来シベリアを東進したロシアは，17 世紀に太平洋側に達した。安永 7（1778〉年，ロシア船は蝦夷地に来航している。幕府は，寛政 11（1799）年蝦夷地を直轄領とし，享和 2（1802）年には箱館奉行を設置して蝦夷地の防備にそなえた。明治元(1868)年箱館奉行を箱館府としたが，翌 2 年 7 月 8 日，明治政府は，箱館府（同年 9 月に函館と改称）を廃して，太政官の下に，諸省と同格の開拓使を設置した。同年 7 月 22 日，政府は，「蝦夷地開拓之儀先般御下問モ有レ之候ニ付，今後諸藩士族及庶民ニ至ル迄志願次第申出候者ハ，相応之地割渡シ開拓可レ被ニ仰付一候事」(『太政官日誌』）と布告して，開拓に着手した。
>
> これは，ロシア南下の脅威を防ぐためと，戊辰の内乱後の士族の救済策でもあった。
>
> 明治 2 年(1869) 8 月 15 日，蝦夷地を北海道と改称し，11 か国 86 郡に分け，同月 28 日，「北海道開拓之儀ハ兼而被ニ仰出一候通リ即今之急務ニ而，追々御手ヲ被レ為レ着候処，何分全国之力ヲ用ヒズンバ成功無ニ覚束一，依レ之今般別紙地所其藩へ支配開拓被ニ仰付一候間，桔据経営実効相立候様，可レ致事」』（『太政官日誌』）と，金沢藩ほか 8 藩へ達した。開拓使は，北海道の重要な土地をみずから支配し，他はこのように各藩に分割して開拓を命じたが，信濃国の藩は開拓を命ぜられなかった。

III．信州信濃では北海道開拓をどうみていたか。

（本節は，大部分，『長野県満州開拓史　総論』（1984）の見解に負っている[10]）

⑴　長野県からの移住は少なかった（四つの理由）

まず，長野県地方ではどう見ていたか。実際に，長野県から北海道への移住が少なかった。その理由として筆者の考えは以下のようなものである。

⒜　長野県へは開拓使からお呼びが掛からなかったことが挙げられる

開拓使は， 8 藩に命じた。（金沢・鹿児島・静岡・名古屋・和歌山・熊本・広島・福岡・山口の 9 つ（鹿児島が早々と離脱したので， 8 つ）の大藩に分領支配を強制させ，とくにロシアに近い天塩・北見・根室・釧路などを割り当ててロシアの南下への防備を考慮することにした。

とにかく，明治 25 年から同 29 年における長野県民の北海道移住者数は，明治 31 年 3 月 4 日，

北海道庁から長野県庁へ送付された参考資料によると，第1表のように，年間122人から290人，合計943人であり，これは全体として少数で下位県に属している。

すなわち，長野県の北海道移住者数は，5か年計で府県別第35位であった。移住者の多い諸県は，5か年計が3万人以上の青森・石川両県をはじめ，1万人以上は，新潟・秋田・富山・福井・岩手・徳島・香川の順で，東北・北陸の日本海沿岸に多く，岩手と四国の諸県がついでいた。中部諸県では，愛知県が5カ年計5077人（府県別第15位）と比較的多い。

第1表　長野県からの北海道移住者

年	移住者数	移住戸数	1戸平均
	人	戸	人
明治25	173	54	3.2
26	290	56	5.2
27	190	66	2.9
28	168	90	1.9
29	122	63	1.9
計	943	329	2.9

「29年北海道来住往住戸口表」
『明治31年北海道移住一件』（長野県庁蔵）より作成

家族移住が一般的であったと推定されるが，26年には，集団移住の可能性もうかがえる。

(b)　特殊部落は，中部地方では長野県に多かったこともあり[11]，当時は，「部落民を蝦夷地開拓へ」といった意見も出ていた

『長野県満州開拓史　総論』（1984）によると，そうした状況に対し，政府の公儀所への建白がみられる。それは，当時は，「穢多非人」の差別的身分解消のために，「蝦夷地等へ御移シ」になるという風評に対し，それに反対する内容であったという。

特殊部落については，明治5年に「壬申戸籍」が出来，姓名を名乗ることになったが，華族・士族以外は「平民」とされたが，部落民は「新平民」となっていた（差別意識は依然として継承されていたということかもしれない）。

(c)　長野県下の郡市長にあっては，明治30年を過ぎても北海道移住には消極的であったことが窺える

同じく『長野県満州開拓史　総論』によると，明治31年8月19日，長野県内務部長は，内務省からの照会のあった「北海道移住民ニ付取調の件」を，県下各郡市長にあて，至急回答して欲しい旨の照会をした（『明治31年北海道　移住一件』長野県庁所蔵）。

照会事項は，(1)「本県ハ，北海道移住民ナキニ非ルモ，他府県ニ比シ甚ダ少シ。依テ移住ヲ企ツルモノノ原因ト移住ヲ企望セザル理由」，(2)「将来ニ於ケル北海道移住者ノ傾向」の二つであった。なお，このさい，内務省から海外出稼についても照会があったが，「海外出稼ハ本県ニ於テハ最モ少数ニ付，取調ヲ要セザル見込ミ」として，各郡市長への照会はとりやめとなった。

長野県の北海道移住者について，郡市長の回答は，「従前移住者無レ之」（下伊那），「本郡人民ニシテ北海道移住ヲ企ツルモノ未ダ一名モ之レナク」（下高井）と報告したもの，「従来僅々数名ニ不レ過」（北佐久），「是迄移住ヲ企テタルモノ鮮ク」（南安曇），「本郡内ニ於テ北海道へ移住シタルモノハ是迄数人に過ズ」（下水内）と述べたものが，一般的傾向を示していた。

移住者が，移住を志した動機については，「資産ナク生計ノ途ニ窮シ，北海道ニ移住シ生計ヲ立テントスルモノ」（南佐久），「事業其他失敗ノ為メ，破産者等ノ無レ拠移住スル」（北佐久）な

ど経済的理由が，最も多いと報告された（第2表）。

ここでは，「諏訪」地方の動機に「開拓で過分の収利を期待」が出ていることに注意する。

第2表　北海道移住の動機

動　機	郡
生計の途に窮す	南佐久，北佐久，諏　訪 上伊那，南安曇，上高井 上水内，下水内，埴　科
開拓で過分の収利を期待	諏訪，上水内
拓殖事業に従う	西筑摩，南安曇
開拓商業など試験視察	北佐久
開拓を国益とみる	南佐久
進取の気象，永遠の希望	南安曇
前途希望の土地	小　県

『明治31年北海道移住一件』（長野県庁蔵）より作成

南佐久郡長は開拓を国益とする人々がいたと回答したが，埴科郡長は，「国利ヲ増進スル等ヲ提言スト雖ドモ，其実ハ然ラズ。概ネ家屋ヲ蕩尽シ，親族ノ相ヒ幇助スルモノナク，窮迫ノ極移住スルモノ，或ハ不時ノ災厄ニ遭遇シ，糊口ノ道ヲ失ヒタルモノ等二外ナラズ」と，国益は建て前にすぎないと指摘した。下水内郡長は，「従来農家ニシテ，多少ノ野心アル輩ガ，企業ノ失敗ヨリシテ貧困二陥リ，其村内二於ケル信用地ヲ払ヘ（イ），如何トモ為シ難ク，去トテ彼等ハ地主ノ前二叩頭シテ，終生粗衣粗食ノ小作百姓ヲ以テ甘ンズル如キハ欲セザル処ナレバ，同ジク恥ヲ晒ラスナラバ，寧ロ未開ノ北海道ニ至リテ，一擲運命ヲ試ムル方，万一意外ノ僥倖ヲ得ル事有ルヤモ知レズ」といった考えが，移住原因の大部分とまで，言い切っている。

北海道移住を希望しない原因については，北海道に関する知識・情報のないこと，固守的で進取の気象に乏しく，先祖からの土地を離れることをきらう人情などが指摘されているが，もっとも重要な原因として，養蚕・製糸業が盛んなこと，人口に比して山林原野が多く，経済的に移住の必要性が乏しいことがあげられた。将来における北海道移住の可能性については，人口増大による耕作地の不足，北海道開拓への理解の進展と奨励などで増えることも考えられるが，農蚕業などの振興が郡内ですすんでいる（下伊那）などで，移住の希望者はほとんど皆無であろう（上高井，北安曇，上水内，長野市）と答える郡市が多かった。これらを要約した「北海道移住者ニ関シ回答ノ件」は，県第三課戸籍係が起案し，内務省内務部第一課にあて，31年9月30日，次のように回答された。

一，北海道へ移住ヲ企ツルモノノ原因ト移住ヲ企望セザル原因

本県ヨリ北海道へ移住セルモノノ内ニハ，多少ノ財産ヲ有シ，確実ナル目的ヲ以テ，熱心拓殖二従事セルモノナキニアラザレドモ，十中八九ハ商業其他ノ事業二失敗シ，窮迫困乏ノ極，一定ノ資本井（？）目的モナク，漫然移住シ，一身ノ生計ヲ立テント欲スルモノニシテ，未ダ一身ヲ挙ゲテ全道ノ拓殖ニ（ママ）ニ委タネントスル遠大ノ志ヲ有スルモノ少シ。是ヲ以テ，移住後，意ノ如クナラズ一層ノ困難ヲ告グルモノ，主トシテ北海道ノ事情ニ明カナラザルノ致ス所ナリト錐モ，近年県下養蚕製糸ノ業，益盛大二（ママ）趣クニ伴ヒ，細民糊口ノ道ヲ得ルノ容易ナルト，前述無資力者渡航後ノ失敗ニ鑑ミ，容易ニ墳墓ノ地ヲ去り遠ク他郷ニ移住セントスルノ企望ヲ起サザルモノノ如シ。

一，将来ニ於ケル北海道移住者ノ傾向

前顕ノ如キ実況ナルヲ以テ，将来天災地変等，著シキ変異ヲ生ゼザル限リハ，多数ノ移住企望者

ヲ生ゼザルベシ。然レドモ，他日北海道ノ事情ニ明カナルト共ニ，社会ノ状態漸ク複雑ニ趣(ママ)キ，従テ生活ノ困難ヲ感ズルニ至ラバ，或ハ団結移住等ノ企望者ヲ生ズルナラン。

長野県民による北海道移住が成功したとはとらえられておらず，将来も移住拡大の可能性は薄いとみている。

明治政府からの質問に対する返答をみると，時の為政者の研究不足，情報収集不足が窺えるが，長野県から石狩国へ移住願を出し，認められなかった事例があった。『長野満州開拓史　総論』には，以下のような記述がある。

明治16年4月，長野県上伊那郡小野村の平民・農業土田某は，戸長・郡長の奥印をとり，本人・父・妻・長男・弟2人のほか同居2人の計8人連名で「荷物四箇但四拾銭，今般北海道札幌県石狩国札幌郡白石村字厚別，番外**百瀬松五郎**方江送籍移住シ，農桑ノ業ニ就事仕度志願ニ付，横浜ヨリ小樽港ニ至ル渡航ノ儀，御保護被ニ成下一度」(『明治12年～15年　庶務雑件御指令書綴込』**上伊那郡辰野町役場蔵**）と，北海道への渡航願いを農商務卿西郷従道に提出したが，5月12日付で当分の間，聞届け難いという返事が出た（武田安弘「明治期における北海道移住民」，地方史研究協議会編『北海道―歴史と生活』)」とある。

ということで，開拓不成功例は集めたが，成功例はあまり把握していなかったことが考えられる。とにかく北海道開拓へ人を出すことに消極的であった。

例えば，明治16年十勝へ入った与田勉三のバッタの大襲来による失敗などは，北海道開拓に対する負の有力情報として入っていたのかもしれない。

しかし，実際には，これらの判断とは違ったものもあったのである。

上島　正（以下上島）は「札幌の歴史を築いた先人達」に名前の挙がっている人物であるが，「花畑・東皐園」や「札幌諏訪神社」を作った人として紹介されている。しかしながら，筆者等が上島を調べていくうち，彼の業績はそれ以外いろいろあることが分かってきている。

例えば，札幌へ入った上島の「想い出の記」には，以下のような内容のことが書かれている。

上島は，明治10年に単身でやってきて米作などで成功を収めたので，ひとまず帰国し財産を悉く皆売り払いって東京より随行の一家族とともに明治11年6月にやってきて開墾を始める。

1年目に，1反半耕して300円（現在の貨幣価値で約300万円）の収穫あり，2年目に6反耕して300余円獲得，3年目に1町5反耕して300余円を得ている。

(明治13年に，藤森銀蔵，藤森万吉，上嶌助（いずれも長野県出身である）の3戸がやってきている)

5年目に，上島は，牛山民吉の開成会社が人員募集しているというに応じて，信州へ行き旧諏訪から30余戸を連れてきたが，東京で牛山に面会すると約束と大いに相違することが分かったので牛山と破約して，札幌で別に1村を作る計画でやってきた。

彼らのうち，「当時国許から来た連中は普通移住とは違って少なくとも 7，8 百円，多きは千円以上（700～1,000 万円程度）の金子を懐中して居りました，で結局随意に地所を買うことになりました」とある。

以上のような事柄を，上島が一時帰郷して話したに違いない。これに呼応した上諏訪からの入植者たちの「開拓で過分の収利を期待」する程度は相当のものであったことが想像できるのである。

また，昭和 13 年（1938）に書き記された若林　功の論文もある[8]。

> 二十余戸の一行は月寒，圓山，琴似，篠路，白石等に土地を求めて分散した。國を出る時財産処分で得た最少二百圓，最多一千三百圓の金で新懇犁や，再懇犁や果樹の苗木等を求めて携行し，之を以て二十余戸の中七戸は他の仲間の者より薄資であったに拘らず未開地の開墾を有利なりとして今の厚別の駅附近に一戸一萬坪ずつの未開地を借り受けた。後明治十九年に貸付，払下の制度が出来て既墾地は給興せられ更に一戸に付十萬坪を限り追加貸付されたが防風，薪炭用の林地を出願しても遂に許されなかったことは今日でも遺憾としている。

(d)　養蚕・製糸業が活発化して人手を必要としていた

明治期，上諏訪は，ことのほか養蚕・製糸業が盛んで人手を必要としており，これが女工哀史「ああ，野麦峠」を生んだ郷として有名となった理由でもある。

(2)　上諏訪から北海道へ移住者の出た理由として考えられることがら（四つの理由）

(a)　北海道開拓には大金持ちになる夢があるという投書もあった

明治 14 年（3 月 31 日）の『松本新聞』の投書に，「無産ノ民北海道へ移住スベキノ論」があった。「土地ヒヨクニシテ五穀豊カニ熟シ漫々ノ海中魚産多シ，嗚呼天与ノ土地ト云フベシ」とし，ヨーロッパ人民は剛毅勇敢で，コロンブスがアメリカ州を発見したのも，「皆ナ競フテ新地ニ移リ，風雨多年，雪霜幾苦年，其国ノ為メニ土壌ヲ開キ，其身為ニ棒莽ヲ拓キシニアラズヤ」と述べた。「今ソレ北海道ノ地タルヤ，亦猶彼ノ米ノ如シ，而シテ米ヨリ亦猶易キモノアリ」とし，北海道の移住を，いわゆる「新大陸の発見」以降のヨーロッパ人の北アメリカ移住になぞらえている。アメリカでは「土着民ノ頑民」の抵抗があったが，「今我北海道ハ幸ニ此難ナキノミナラズ，政府ノ注意保助モ亦厚シ」とし，「蹶然去テ北海道ニ行ケ，行テ犂鋤ニ従へ。必ズ美田ヲ得ン。必ズ金庫ヲ得ン」と呼びかけたものであった。

(b)　一旦県外へ出た人が，北海道開拓へ関心をもった

厚別への移住関係では，前述の上島　正（長野県諏訪郡湖南村（現在の諏訪市）出身）が特筆される。もとは武家の出だが，東京へ出て武士を捨て町家の丁稚に入っている。商人として東京と大阪を行き来した経験もあり，測量士の資質も備えており，明治 10 年北海道の可能性を探りに札幌にやってきた。そこで，米作に成功の可能性を感得し，一旦故郷へ帰って家財道具

一切を売り払って（郷里の土地の広さは，300 坪程度だが周辺では最も大きいようである），札幌へやってきて終の棲家とする。親類縁者も続々やってきて上島家は皆札幌へ渡っている。こうして実際に成功を収めたことから，開拓会社の勧めもあり，人々に移住を勧めるため単身直接故郷へ出向く（明治 15 年）。

このとき数人が上島に賛同して同行する（一攫千金を夢見たものが多かった。その証拠にそれぞれ数百万から一千万円を所持していたという。平民であったし，決して食い詰めた人たちではなかったのである）。途次，東京へ寄ったときに北海道行きを決意していた河西由造等数人も同行する（由造は，明治 14 年に札幌にやってきて周辺を視察していった可能性が高い）。

(c) 兵役を逃れる途であった可能性も高い

明治 6 年（1873）の徴兵令「常備兵免役慨則」に各種免役条項があり，北海道（沖縄も）の場合は，兵役よりも開拓事業が優先されることで，徴兵制度の枠外に位置付けられていた[12]。

(d) 民間の開拓会社が勧誘した

(3) 低い移住熱への対応と開墾事業の推進

以下は，『長野県満州開拓史総論』よりの抜粋である。

明治 19 年 1 月 26 日，北海道庁が設置され，三県一局は廃止された。明治 17 年ごろから農村は不況におちいり，労働力が非常に低廉で豊富に得られるようになったので，資本家はこの労働力を北海道に移して開墾企業を営もうと希望するようになる。

岩村北海道長官は述べている。

> 渡航費ヲ給与シテ，内地無頼ノ徒ヲ召集シ，北海道ヲ以テ貧民ノ淵薮ト為スガ如キハ，策ノ宜シキ者ニ非ズ。自今以後ハ貧民ヲ植エズシテ，富民ヲ植エン。是ヲ極言スレバ，人民ノ移住ヲ求メズシテ，資本ノ移住ヲ是レ求メント欲ス」（『新撰北海道史』第 4 巻）

明治 19 年 6 月 29 日，「北海道土地払下規則」を公布（閣令）し，同時に，明治 5 年の北海道土地売貸規則等を廃止した。従来の土地売貸規則は，願出があれば一定の土地が払下げられ，一定の期間内に着手しないものは返還させるとしたが，１万坪うち，１～２坪を開墾して着手したとし，他日地価高騰を待って売却して巨利を得ようとしたものもいたからであった。そこで，この北海道土地払下規則は，土地を貸下げ，事業成功の後この地代金を徴収し，地券を下付するというもので，その面積はやはり一人 10 万坪を最高とした。

ただし，この制度外の土地を必要とし，かつ，その目的が確実であると認めた大きな事業は制限をこえることができた。払下げ代金は 1000 坪に付き金一円とし，成功の後これを払下げ，その翌年から 20 か年後にならなければ，地租および地方税を賦課しないとした。（前出『北海道・拓殖要覧』）

こうして政府は，もつばら経済的・社会的施設の充実に努力し，道路の改さく，植民地の選定，鉄道の付設，港湾の修築，電信電話の常設，国有未開地払下法規の改正などを行った。(以上，長野県民資料)

政府のおこなった施策の一つに殖民地区画法があった。広大な殖民地を処分する一方法としてきわめて便宜な方法であった。一時に多数の移住者が押し寄せてきても，きわめて迅速に土地の処分ができた。明治十九年から殖民地選定事業が着手され，22 年までに，まず大原野の選定が完了した。

Ⅳ．上諏訪とはどういうところであったのか

「上諏訪」は，江戸時代には「高島藩」の城下町であった。天正 10 年（1582 年）に武田氏が滅び，(本能寺の変があって，信長が倒れると）諏訪頼忠が，諏訪に復帰する。

慶長 6 年（1601 年）諏訪頼水が高島藩初代藩主となる。高島藩の藩格（地位）は譜代である。

彼らは大部分，長野県上諏訪町出身となっている。長野県は，かつて信州信濃とも呼ばれ，アルプスの山々に囲まれた風光明媚な土地柄である。県庁所在地の長野市には「善光寺」があり，南に下がると日本 4 大名城の一つ「松本城」もある。

さらに下って東南方向に「諏訪湖」がある。糸魚川静岡構造線（フオッサマグナ）の断層運動によって，地殻が引き裂かれて生じた構造湖（断層湖）である[13]。

現在の高島城は，本来は山の上にあったが(高島城址あり)，武田信玄に反旗を翻したことから平地へ降ろされたとかで，こじんまりした城になっている（昭和期に建て替えたとかでミニチュアセットの面影がある)。

ところで，現在，かつての上諏訪村は明治 24 年に町名になり，昭和 16 年に諏訪市に併合され，現在は，駅名「上諏訪駅」にその名を留めるのみである。

現在の諏訪市は，長野県南信地方の市で，諏訪湖に隣接する工業都市で，諏訪湖や上諏訪温泉，諏訪大社の下社･上社，霧ヶ峰高原を抱える観光都市でもある。第 2 次世界大戦後，時計，カメラ，レンズなどの生産が増え，山と湖のある風土と相まって，東洋のスイスと称されたことでも有名である。地酒メーカーもたくさんある。また，ことのほか神社仏閣の多いところで，特に，「諏訪大社」は全国的に有名である。

「諏訪大社下社（しもしゃ)」には「春宮」と「秋宮」があり，秋宮は相当立派に見える。ここの神は「木」に宿っているとのことで，「御柱祭り」用の御柱が立っていた。

また，「諏訪大社上社（かみしゃ)」には，「本宮」と「前宮」があり，また，上社には天然記念物「長野県天然記念物・諏訪大社上社社家」もある。

ここの神は「山」そのものに宿っていることになっている。下社，上社とも神は同じだが，神は回って歩くのであるとされている。そのときどきで宿主を変えているらしいのである。有名な「御柱祭り」は，7 年程度ごとに取り替えるということであるが，御柱を降ろす儀式は，

とにかく危険そうであるが勇壮である。

諏訪地方と言えば，かつての「女工哀史」の「ああ，野麦峠」の舞台としても有名である。

日本が開国した明治から大正にかけて，外貨を稼ぐ手だては，生糸であったが，諏訪地方には豊富な水もあり，製糸工場が集中していた。養蚕が日本を支えていた時代，その陰では10代，20代のうら若き製糸工女たちの悲惨な生活があったという話である。

そして，かつての上諏訪は，諏訪湖の東側にあって，四方を山に囲まれた「諏訪盆地」の中にある自然の豊かな土地柄の一村であった。

湖南村は現在の諏訪市湖南になっているが，諏訪湖の西側に延びるなだらかな傾斜地で，『諏訪市史中巻』に，南真志野村は「承久元年（1292）7月の『諏郷十郷日記』に「真志野四十八丁合廿五間之内二間共僧二間神主」とあり，この記録中最大の郷となっている。

中世には諏訪社上社の内県介の役を度々勤め，「大祝職位事書」には，建武2年（1335）以来大祝の即位の儀式の費用負担者として常に真志野神主（こうぬし）の名がみえる。慶長18年（1613）3月の高辻に，高1146石3斗8合，とあり，正保4年（1647）3月の「信濃国郷張」ち同様である。享保18年の『諏訪藩主手元絵図』では，北真志野村・板沢新田・南真志野村の三つに分けて書かれ，家数は北真志野村162軒・板沢新田5軒・南真志野村186軒・寺二か所とあり，石高は三か村まとめて1488石2斗余り，と書かれている。この様に実際には南北に分かれて扱われることが多かったが，元禄15年（1702）・天保5年（1834）の信濃国郷張でも一村として扱われ，天保の石高は1296石3斗余で，「高嶋藩屈指の大村であった」と書かれている。

諏訪市の東側にある岡村の住民たちは，午後遅くには山陰で陽の当だらなくなる北真志野や南真志野を「半日村」と呼んでいたという。実際はどうだったか，諏訪市史によれば高嶋藩一の大きな村とあるので，当の村人たちは，そう呼ばれていることを知らなかった可能性は大である。

しかし，中澤兼三郎が昔住んでいた住居跡など湖南村を訪ねると，1戸当たりの宅地は30坪位（100 m²）で，当時は粗末な藁小屋を建てて住んでいたのではないかと思わせるものがある。全体の風景としては，畑の面積も少なく，傾斜地を段々畑にして細々と農業を営んでいたことが想像される。

諏訪ではどういう教育が行われていたか。

明治5年に学制が発布し，新しい教育体制，教科書，内容の教育改革が進められている。諏訪地方では，学区制発布と共に，早速，尋常小学校が作られている。とにかく教育に熱心な土地柄であったといえる。

8人の少年期・青年期は，江戸末期にあたっている。彼らは，教育熱心な土地柄なので，それまで何がしかの教育は受けていたと思われる。

上島は，『想い出の記』[14] に，

幼少より画が好きで，15，6歳のころには友艸（そう）軒湖山とか虚舟とか号していたし，狂歌などを詠むときは花園の鍬持と称していた。書画は9歳から17歳まで生之堂鏡湖先生に就いて学んだ

と書いている。

なぜ画を学ぶことになったのか。その理由としては，歴代の高島藩主の文芸（教養）に対する造詣の深さにあったことが考えられる。

上諏訪は，江戸末期，全国有数の教育に熱心な地域であった。諏訪地方の教育の基礎を築いた「高島小学校」に関して，明治5年の学制改革以前からの資料が満載されている『高島学校百年史』の「あらまし」には次のように書かれている[15]。

維新期を迎え高島藩も時勢に対処すべく，皇道を本とする国学校をいち早く生み出し平民の入学を許可した。又，長善館は廃藩置県と共に高島県学校長善館となり大きく変革して存続の努力を続けたが，新時代の中でその封建的な体質は如何ともしがたく旧藩県と共に廃校の運命をたどっていった。しかし藩校の教授・学生達は，新しい時代における小学校の教員あるいは設立世話役となり，新体制出発の基礎固めに大きな役割をはたすことになった。

他方，寺子屋は何の強要もない自由意志に基づく私立の教育機関であり，入門者は身分・格式・性別を問わず全くの自由性普遍性のもとで教育が行なわれていたところに意味がある。上諏訪地区でも十軒以上の塾で五百余名の子ども達が通塾していた。他地区に比して女子の割合が多く士族の師匠の多いのが特色であった。その教育は個別指導による読み書きの実用教育であり，師弟の間の人間関係の深さは瞠目させられるものがあった。近代学校発足時において寺子屋師匠達も教員への転身，学校世話役・学童への入学啓蒙等積極的な働きかけを行なっている。後，筑摩県の就学率が日本一になった原因の一つとしてこの寺子屋教育の庶民への浸透ぶりは無視できない重みをもっていたといえよう。

こうした上諏訪における寺小屋の隆盛については，「全国一の寺子屋」として杉浦幹雄が書いている[16]。

上諏訪は，これまで新田次郎，平林たえ子などの作家をはじめ多くの芸術家，学者を輩出しているが，数学のノーベル賞といわれるフィールズ賞受賞者の小平邦彦は，「江戸期に寺子屋に通ったらしい祖父」について回想している[17]。

明治元年に十一歳であった祖父は，子供の頃寺子屋にでも通って白文の素読で漢文を学んだのであろう。白文というのは訓点をほどこしてない漢文のことで，素読は意味を説明しないで音読さ

せることをいう。「読書百遍意自ずから通ず」で，素読を繰り返していると意味は自然に分かったものらしい。

後に私が中学の三年になった年の夏休みに，漢文がわからなくて困っていると，祖父が教えてやろうという。これは有難いと思って教科書をもっていくと，祖父はそれを眺めて「へー，こんなものが読めんかねー」というだけで，遂に一言も文章の意味を説明してくれなかった。白文の素読で漢文を学んだ祖父は，教えるというのがその意味を説明することだということに思いが至らなかったのであろう。

また，当時，上諏訪では，武士の子弟のみならず，農民や町人の子供も寺小屋や漢字塾（漢籍の素読）などで文芸や心学（石門心学：石田梅岩の説で，武士の俸禄も商人の利益も同じものとする考え方）などの素養の数々を身につけることができるようになっていた。

石門心学は，日本における「経営学」の嚆矢ともされている。先にも見たごとく商売のあり方から始まっている。日本では士農工商的身分発想が根強く，「商」の研究が遅れたが，17 世紀後半の元禄時代には，読み書きそろばんのテキスト「商売往来」が広く読まれるようになった。元文 4 年（1739 年），石田梅巌が『都鄙問答』（とひもんどう）を刊行している[18]。

高島藩の重臣の嫡男であった上島の受けた教育も，歴代藩主が，漢文や俳句など文芸を奨励していたこともあり，おそらく，彼は藩校に通いながら，儒学など武士道を学びながらさまざまな素養を気に付けさせられていたのであろうし，また，ことのほか絵（南画）が好きで特別に師について勉強し，雅号を持ったりしている。

上島の思想的背景はどうだったか。当然，藩校などで儒学（朱子学）（仁，義，勇，礼，誠）の素養は積んでいたであろう。また，上諏訪の寺子屋や塾などで盛んに教えられていた「心学」の影響を受けていたと考えられる。

その証拠は，後に検討されるように，あっさり武士を棄て，町人になっていることである。士農工商の身分制度を無視した行動である。さらに行商人もやり，測量士にもなって，最後は開拓者となって米作をはじめ園芸農家となっている。職業の変更には何の衒（てら）いもない。

そこには「人に仕えないことの身軽さ」の心境ものぞいている。一方では，正直に生きることが前面にでている。新渡戸稲造の言う「武士道（Bushido, the Soul of Japan）」の「誠実（sincerity）」も生きていたかも知れない[19]。また，実践を重んじる陽明学も頭の中に入っていたかも知れない。

V．厚別へ，なぜ 8 名の開拓者たちは入植したのか

研究ノート（黒田（2011））の「おわりに」で，「上島　正は札幌の企業家第一号とも言える人物であった」という感想を述べておいた[2]。

それはつまり，当時，上島の札幌で成した二つ点，

〈1〉単独で米作りに成功したこと（札幌で最初の米作り）。
〈2〉上島の故郷（信州信濃の上諏訪）から大勢の人々を連れてきたこと。
を中心に考察を進めた結果から得られたものであった。

上島は，幕末期の混乱の中で，権威を失った武士に見切りをつけた。幕府側（佐幕派）と勤王攘夷派（倒幕派）に分かれて血で血を洗う抗争の姿を見て武家に嫌気がさした。

そうかといって，国元へ帰っても，もともと武家の出身であってみれば状況がもっと悪くなることは必定である。

先がどうなるかも誰も分からない。武士でなければ何でもよいと考える。自活していけることは何か。一体何をすればよいのかと考えたとき町人だったということではないか。

しかし，あまりにも早い転職の決断である。江戸へ出てから半年で町人になっている。どういう判断があったのか。国元と相談したのか，はたまた，国元の命令だったのか。

いずれにしろ，その後は江戸・大坂間の行商人をやり，さらに測量士になって札幌へやってきて開拓者になっている。

考えてみれば，上島のような時代を見通す力，変化の方向性の読みの鋭さ，決断力の早さ，変わり身の早さ，自らの手による新しい世界の開拓をしようとする者にとって，北海道開拓はうってつけの場所であったといえるのかもしれない。

かくして，上島は，札幌に安住の地を見出した。そして，自身の経験に基づいて，上諏訪へ出向き人々を連れてくる。

もっとも，上島には一つの〝志〟が芽生えていたのかもしれない。一度捨てた故郷・上諏訪である。残された人々もあまり幸せそうでもない。何とか彼らのためにも今一度この地札幌で再興・再挑戦させてやりたい。同郷の人々と新しい一村を作りたいという願いである。その思いが故郷へ走らせたのかもしれない。結局，そのことを理解し説得に応じた 30 名ほどを連れてきた。

結局，一村（上島部落といったような）の夢は果たせなかったが，札幌でそれぞれ散らばった人々がその地で成功を果たした。

彼ら 8 名はどうやってき北海道に渡ってきたのか

昔から信州人の次，三男たちの多くは，江戸（のちに東京）に出るのが普通であった。今の諏訪大社の下社の近く，下諏訪には甲州街道と中山道との合流点があった。つまり，ここからはそのどちらかを通って東京へ向かうことができたのである。

しかしながら，いかに昔の人は健脚であったとは言え，一口に上諏訪から東京へ出るといってもその道のりはきわめて厳しいものだったに相違ない。そのどちらも 200 km 以上であり，途中名だたる険しい峠を越えねばならない。

彼らは，方向からいっておそらく甲州街道を上ったと考えられのであるが，こちらは全長約

210 km で，街道には，「小仏峠」，「笹子峠」といった名だたる難所が控えていた（現在でもそうである）。一方，中仙道には「碓氷峠」などがある。

また，北海道へは東京（横浜）から難破の可能性のある船を使って 2 ～ 3 日掛けて渡ることになる。こうして，全体として最低でも 2 週間は必要な旅であったと考えられる。

どのようにして北海道へ渡ったのか

彼らは，なぜ，どのようにして北海道へ渡ったのか

作家坪内逍遥の小説『当世書生気質』には，明治 10 年頃の世相が映し出されていると言われているが，そこでは全国から人々が仕事探しに集まり，とりわけ人力車夫と書生が，あふれかえっている様など，時代の混乱状況が詳細に描かれている[20]。

確かに，幕末から明治への移り変わり時には，当然，全国各地から藩士や次，三男が，職や職の情報を求めて東京に集まってきている。

東京には，全国からの藩を失ったかつての士族や次，三男が集っていた中で，多くの信州人，諏訪人も集まっていたと思われる。彼らは同郷意識が非常に強いことで有名なので，今でいう県人会みたいなものを作っていたかも知れない。

幕末のころは大変な不況期で，借金で首の回らなくなった旗本など武士を救うため幕府は次々と借金帳消しの改革政策を打ち出したため，特に，それまで隆盛を誇ってきた札差も壊滅的な打撃を受けた。「蔵前の旦那衆が，たった一日で没落した」という噂が江戸中を駆け巡ったり，あれほど貴重だった札差株は，大暴落して買い手がつかなくなったりしている。

いずれにしても，江戸末期から明治初期にかけての東京は，蔵前の米商人など信州信濃出身者にとって住み心地のよい。場所ではなくなっていたのである。

一方で，明治新政府としても，維新後の混乱であぶれた藩士を救うことが第一の政策課題であった。このようなとき庶民の生活の手当てまで十分手がまわるはずもなく，商人だって同じであった。

信州信濃人たちの寄り合いでも，東京脱出の相談が頻繁に行われていたと考えられる。どこか新天地で一からやり直そうと言い合う。そうした中で，外国で心機一転やり直そうという気運が高まっていったと想像されるのである。

ただ，日本から外国への移民といえば，1885 年（明治同年）のハワイへの移民が始まりである。その後，明治中期から後期へかけてブラジル，アルゼンチン，ペルーなどの南米への移民が本格化していくが，明治の初期までは後年移民で有名になる外地は，まだあらわれていない。

当時の外地として有名だったのは，北海道であった。そこで，彼らは，行く先の外地として北海道を選んだのではないか。

かの坂本龍馬も蝦夷地（北海道）へ渡る夢を見ていたとの説が有力である。彼は，船を所有していたので，当時盛んだった北前船を見習って交易による利益獲得を考えていたと思われる。

龍馬自身は維新を目前にして刃に倒れたが，明治 30 年頃から彼の甥やその子たちが，その志を継いで北海道の北見，浦臼，広尾などに渡っている[21]。

もともと江戸時代までは，北海道は外地であった。中でも栄えていたのは，松前(今の函館)である。

松前氏は，日本で初めて異民族の住む蝦夷島にできた藩として有名であるが，江戸幕府の大名として正式に本領安堵され，家康より蝦夷地の支配者として交易の独占権を認められたところである。

鎌倉時代がはじまりという近江（滋賀県）や奈良の商人も，江戸時代には，北前船を利用して函館を中心に交易を活発化させていた。それぞれの地場特産品を道産品と交換して莫大な利益を得ていた。「身欠きニシン」や「カニの缶詰め」などは近江商人の発明と言われている。

Ⅵ．厚別を，彼らはどう開拓したか

由造と他の入植者の「地所下渡願」：

明治 15 年 6 月 7 日，「高嶋舎惣代・川西由造」名で，「中沢兼三郎，花岡太吉，藤森弥惣治，金子藤重」の連名で「地所下渡願」を提出（このとき川西（河西）由造の名前は除かれている）。

それに対して，明治 15 年 9 月 27 日に札幌県令代理から各自から出願するようにとの返答があった（出所：『あつべつ区再考 —— 自然・ひと・歴史 ——』p.42-43）。

（この間，明治 15 年 10 月に百瀬松五郎（上諏訪村出身）が家族 4 人とともに来厚。）

こうして，明治 16 年（1883）3 月，**中澤兼三郎，花岡太吉，藤森弥惣治，金子藤重，百瀬松五郎の** 5 人が各自 1 万坪の「地所下渡願」を提出し，同 4 月 26 日付けで許可されている。

また，明治 16 年 6 月 24 日，川西由造が厚別の地への「地所下渡願」を提出し（戸籍に相当する送籍証の添付なし），同年 7 月 15 日付けで許可されている。

この間，明治 16 年 6 月に濱　源蔵（現，宮川村）が，8 月に小飼清右衛門（現･茅野市）が来札しており，源蔵，清右衛門の二人には，明治 16 年中に厚別入植の許可が下りている(小飼清右衛門の送籍証なし)。

こうして，8 名による厚別への入植が，「明治 16 年」に始まったことになったのである。

ただし，なぜか，河西由造と小飼清右衛門の「送籍証」は現在のところ見つかっていない。

開拓者たちの苦労

明治 16 年当時，札幌は，国家の大事業として，大金をばら蒔きながらの都市建設が，ようやく体裁を整えつつあった。

また，厚別でも入植地には，すでに，幌内鉄道の線路が敷かれ，曲がりなりにも，文明開化の象徴である蒸気機関車が，目の前を行き来していた。この線路を挟んで，今の JR 厚別駅付近に，由造等の 8 戸の各々が落ち着いたのである。当初，由造は，単身開墾であったが，冬には，

札幌に置いた家族の元へ戻る暮らしをしていた者もいた。

開拓者にとって，新天地・厚別での暮らしは，開墾に明け暮れする，苦しく，辛い毎日であった。この頃の厚別は，小高い所は森林とクマイザサ，低い所はヨシが一面に生え，その中に，ハルニレやハンノキが生えていて，春から秋までビシャビシャと水につかっている泥炭湿地であった。一本一本木を切り倒し，根っこを掘り起こして火をつけながら，あたり一面を焼き払って行き，その後，鍬で，一歩一歩土を掘り起こしていくのである。

『信濃小百周年記念誌』には，部落形成について書かれている。

> 厚別東町・西町に入植する際，由造たちは，1戸1万坪の未開地を借り受けています。初めて作った田から，3，4俵の米が収穫できるようになり，厚別の水田造りに自信を持つようになりました。
>
> 明治19年には，貸与・払い下げの制度ができ，既墾地は貸与され，さらに，10万坪に限り追加貸与されています。この様な発展の様子と，北海道開拓の機運の盛り上がりから，厚別付近に入植するものも増え，小作を希望する者もでてきています。

由造と同じ明治16年に中澤兼三郎と中澤政吉，明治17年に百瀬松五郎が，今の東町（現在の厚別中央に相当）に入植している。

明治19年までには，小池嘉一郎を始め信州の人達が10人余りが近くに住んで，少しは賑やかになっている。

明治20年から2，3年の間には，江別，野幌屯田兵の家族，故郷の信濃から移って来た人たちで，元の川下地区，東町，西町地区のあちこちに40軒程の家が建って部落の形になっている。この頃から，この付近を〝**信州開墾地**〟と呼ぶようになった。

後年，厚別地区は，川下・山本を中心として，北海道でも良い米のできる所として有名であった。しかし，それまでは，土地が低い事や，豊平川が曲りくねっている事などが重なって度々水害に襲われたり，山本地区などは，川から遠い事もあり開墾が遅れていた。

明治26年，川下に入植した中澤八太郎は，品種の良い稲を作ることに取組み，実際に何種類かの品種の開発に成功したと言われている。そればかりでなく，この地区の特徴である泥炭湿地の水捌けを良くする事に力を傾け，暗渠排水を始めている。

これは，柴木を束ね，土中に埋めるもので，柴木の間にしみこんだ水を導くことによって，土中の水分を減らすという画期的なものであった。八太郎のこの方法は，郷里，信州における，桑畑に施工した水道をヒントに考案されたと言われている。

一方，旭町では，明治20年入植の千田松太郎，渡辺吉太郎らが開拓の先駆けとして炭焼きをしていたといわれている。同じ頃，札幌の阿部仁太郎が，阿部農場を経営していた。

この『旭町』と言う名は，国道12号線の江別に向かって右手奥に見えた〝朝日松〟と呼ばれる松の大木に因んでつけられたと言われている。

明治30年を過ぎる頃になると，開墾の努力が実り，生産性も向上して，部落へと発展してい

く。

信濃神社建立（明治 30 年）の頃迄には，鉄道駅の設置や各地への道路の開通，商店・派出所・郵便局，学校等が設置されるようになった。

白石村の一翼としての厚別には，今の大谷地，旭町，東町，西町，川下，上野幌，下野幌・小野幌が，部落を形成している。その各々については，『厚別開基百年史』に詳しく載っている。

前述されたように，明治 19 年，厚別東，厚別西，川下に入植したこの地を，郷里の名にちなんで「信州開墾地」と名付けている。

「信濃小学校」と「信濃神社」のはじまり

明治 26 年（由造入植以来 10 年後），「信濃簡易教育所」（簡易科 3 カ年制）設立認可された。その年の 4 月に，この地に初めての小学校の前身「信濃簡易教育所」と「大谷地簡易教育所」が出来ている。

明治 30 年には，「信州開墾地」と呼ばれていた「札幌郡白石村大字白石村字厚別」に建立した社屋を「信濃神社」と名付け，この厚別一帯の守護神とした。32 年 4 月に，小野幌簡易教育所が，明治 33 年 10 月には，上野幌簡易教育所ができている。

「信濃會」発足と「北海道信濃會規則」の作成

明治 28 年には「信濃會」が出来，会則は，明治 31 年 4 月に「北海道信濃會規則」として作成されている。それは，「趣意書」と「規則」（第一条～十六条）より成るものである。

この「規則」には，明治 28 年の人口が，56 戸で 160 人に達していたとの記述がある。

> 然ルニ北海道ノ気運ニ急転シ郷國人ノ北海道ニ注目スル者漸ク多ク農事ニ続ク者其他商工漁業等各種ノ目的ヲ以テ来住移住スル者天ニ増賀シ明治二十八年ノ移住者ハ草々農業ニ従事スル者ノミヲ以テスルモ　戸数五十六　人口百六十ノ多キヲ算シ爾来陪々ノ増加スルニ至レリ

このとき，由造は丁度 50 歳を迎えていた。

明治 29 年，「愛隣組」（厚別消防分団の前身）が組織された。

こうして，入植以後の厚別の発展にとって欠くべからざる教育文化宗教的遺産といわれるほとんどすべてのものを生み出すにあたって，最初の時点から，由造は中心的な役割を果たしていた。

由造は，後年，結婚はしたが，子宝には恵まれず，未亡人の甥に当たる人を養子（河西一次）にして跡継ぎにした。しかし，一次氏は，長じて公務員になったので，田畑の耕作は他の人が受け継いでいる。

由造は，明治 44 年（1911 年），66 歳で病没した。入植してから 28 年間という開墾の苦闘と晩年の社会貢献の半生がここに閉じられた。

こうした数多くの業績を称えて，昭和13年（1938）に由造の「頌徳碑」が信濃神社境内に建てられている。

おわりに（これからの厚別のまちづくりを考える）

これまで，厚別の開拓史のうち，なぜ厚別中央地区に入ったのかについて，最初の入植者である8名に関わる背景について筆者なりの考察をすすめてきた。

結果的に，合計8名(とその家族)によって明治16年に厚別中央の開拓が始まったのである。

彼らは，最初，明治15年に上島に同行した四名（中澤，花岡，金子，藤森）連名で申請したが，個々人で提出するようにとの達しがあり，(15年中に遅れてやってきた一名(百瀬)を含めて）明治16年になって5名がそれぞれ送籍証を付けて申請する。後にやってきた二人（濱，小飼）を含めて（河西は明治16年に提出）合計8名の「土地下渡願」が揃って許可されたのは，明治16年のことであった。

筆者としては，彼らは，総じて，開拓者というより今日言うところの「企業家(ベンチャー・ビジネスの実践者)」たちであったと考えた方がよいのではないかと考えている。

もとより，厚別の開拓は彼らだけではできなかったことである。厚別に入植した人々それぞれに理由と目的があって，この地にやってきたことは間違いないが，それらの人々の間に相当な協力がなければ地域の発展もないことは確かである。

とにかく，彼ら先人たちのやったことの第一は，全国からの出身者を束ねることであった。

まず，信州信濃出身者により学校が作られたことを機に明治28年に「信濃會」ができている。これに他の地域出身者の多くも賛同して寄附・寄進している。「信濃」という名前がどうあれ，地域発展のための皆の団結とその心意気のあらわれだったと思われるのである。

さらに，「北海道信濃會」の名で「規則」も作成され，賛同した部落民より定期的に会費徴収（寄附）を行なうようになっている。

こうした地域発展のための団結と寄附の精神は，その後も受け継がれ，信濃小100周年記念，信濃中50周年記念などの式典や信濃神社新建立などへの多額の寄附・寄進となってあらわれている。

こうした精神を『信濃小百周年記念誌』では〝信濃魂〟と呼び，それは，われわれ後世のものにも脈々と受け継がれてきているものであるとしている。

「厚別の教育・文化の発展の背景には，地域の人々の団結心と実践のための寄附行為がある」

地域に対する思い入れは人によって違うだろう。筆者にとって厚別とは何か。60数年居住したところ。地域にどっぷり浸った感じである。しかしながら，置かれた環境の厚別地域の方はどんどん変化してきた。いま振り返ってあの頃はよかったと思うことだらけである。

明治16年に信州長野から入植以来，ほとんど変わらず営まれてきたであろう生活や風景が，つまり，かつては厚別も原始林の風情を残した，いわば悠久の風景に包まれていた懐かしさ一杯の田園の地域であったのに，あのときのあれとこれが，厚別をすっかり何の変哲もないものに変えてしまっただという想いもある。

筆者が古稀を迎えたせいもあるかも知れないが，これからこの地域はどうなってしまうのか，暗然たる思いで一杯である。やれるうちに（自分が出来る範囲には限りがあるであろうが）何とかしたいが，どうすればよいのか，を考えることの多くなってきた今日この頃である。

ところで，210万部の大ベストセラー『国家の品格』を書いた数学者であり作家の藤原正彦の父親は，諏訪出身の〝新田次郎〟である（母親は作家の藤原てい）。

その藤原正彦は，最近，雑誌『サライ』の中でインタビューに答えて，父親について語っている[22]。すなわち，

> （父新田次郎は，）出身地である諏訪（長野県）への郷土愛がとても強かった。夏が少し暑いと日照りは大丈夫だろうか，冬が少し暖かいと，これは畑の虫が死なないのではと，いつでも故郷のことを思っていました。すべての文芸評論家が見落としていることですが，父のどの作品にも，郷愁がにじみ出ています。僕は，この家族愛，郷土愛をまるっきり受け継いでいます。だから，自然に祖国愛が生まれるんです。祖国の自然，文化，伝統，歴史そして人に対する愛着です。そして，それと同じように，やはり，父から受け継いだ武士道の精神も大切にしています。

司馬遼太郎も，「風土を考えることなしに歴史を理解できない」と書いている[23]。

> 風土などは，あてにならない。……。
>
> しかしながらひるがえって言うようだが，風土というものはやはり存在する。歴史的にも地理風俗的にもどうにもならずそれはある。私のいうところは矛盾しているようだが，そういうものは個々のなかには微量にしかなくても，その個々が地理的現在において数十万人あつまり，あるいは歴史的連鎖において数百万人もあつまると，あきらかに他とはちがうにおいがむれてくる。ついでながらここで私がつかつている風土という大ざっぱなことばは，風土的気質，性格，思考法といった意味にとっていただきたい。
>
> 要するに，個々のばあいはまことに微量でしかない粒子が，大集団をなしたときに蒸れてにおいでてしまっているものがここでいう風土であるかもしれない。その風土的特質から，人間個々の複雑さを解こうというのは危険であるにしても，その土地々々の住人たちを総括として理解するにはまず風土を考えねばならないであろう。いや，ときによっては風土を考えることなしに歴史も現在も理解しがたいばあいがしばしばある。本書は，そういうこころみで書いた。

筆者にとって噛みしめたい言葉と考えている。

㈱厚別中央歴史の会（札幌市厚別区厚別中央まちづくり会議内）では下記の書物を出版する運びとなった。

厚別中央地区まちづくり会議・厚別中央歴史の会編（2012）『厚別　黎明期の群像 ―― こうして札幌市厚別区の開拓は始まった ――』，2012 年 9 月 1 日発行。

厚別中央歴史の会（以下，歴史の会）のメンバーとして執筆編集に携わった一員として，5 年かけて出版にこぎつけたことには感慨深いものがある。

歴史の会は，平成 18 年に基本的に，「なぜ，明治 16 年，泥炭で作物の育ちそうもない厚別の地に人々（8 名）がやってきたのか，しかも上諏訪から米作りをするために」を解明するために集まって発足した。メンバーは現在札幌市厚別区在住の 7 名（松山瑞穂（代表），多田一也，高橋清一，河西敬一，中澤　豊，根岸　徹と筆者）である。

各メンバーにはそれぞれ固有のテーマをもって臨んでいる。例えば，河西，中澤両氏は，自分たちの先祖はなぜこの地へやってきたのか(それぞれは，3 代目と 5 代目)，であったし，多田氏は，自身がこれまで厚別を取り続けてきた写真や収集してきた厖大な写真をこの機会に時系列的に整理したい，であったし，松山，高橋，根岸氏等は，古くからこの地にとどまっている人たちはもとより，新しく入ってきた人たちにも厚別の歴史を開拓期前後から出来る限りきちんと伝えていきたい，との考えからであった。

筆者の場合は，65 年もの間札幌市厚別区に居を構えておりながら，そこに存在する信濃小学校，信濃神社のように〈信濃〉という名前の付いた由来をもっとよく知りたいということであり，つまり，これまで漠然と伝わっているが，ここではっきりさせてみたいという思いからであった（筆者は，現在の札幌市立信濃小学校（第 59 期），同信濃中学校（第 9 期）の卒業者である）。

歴史の会では，平成 22 年度に小冊子『厚別中央　人と歴史』を発行している。

筆者も下記の「研究ノート」を書いている。

黒田重雄（2011）「札幌の偉人・上島　正に関する一考察 ―― なぜ，上諏訪（長野県）の武家の嫡男が札幌を開拓する企業家となったのか ――」『開発論集』（北海学園大学開発研究所），第 88 号，pp.128-166。

こうして，会の発足より 5 年後に集大成として『厚別　黎明期の群像』という表題の本が出来上がったのである。

注と参考文献

(1) 筆者としては，これは，明治開拓に生まれた，内向きのパイオニア精神のあらわれである。外向

きのパイオニア精神は，それに先立つ，アイヌの人たち，擦文文化の人々の方があった，と考えている。

⑵　厚別中央歴史の会小冊子編集委員会編(2010)『厚別中央 ―― 人と歴史 ――』，厚別中央地区まちづくり会議（事務局　厚別中央まちづくりセンター)。

⑶　黒田重雄（2011)「札幌の偉人・上島　正に関する一考察 ―― なぜ，上諏訪（長野県）の武家の嫡男が札幌を開拓する企業家となったのか ――」『開発論集』(北海学園大学開発研究所)，第 88 号，pp.128-166。

⑷　西田秀子(2006)「屯田兵の稲作願望 ―― 〝水田同志名簿〞（明治 20 年)顚末 ――」『札幌の歴史』，札幌市教育委員会文化資料室，第 51 号，pp.13-26。

⑸　厚別中央地区まちづくり会議・厚別中央歴史の会編（2012)『厚別　黎明期の群像 ―― こうして札幌市厚別区の開拓は始まった ――』，2012 年 9 月 1 日発行。

⑹　札幌市厚別区市民部総務課編（1996)『あつべつ区再考 ―― 自然・ひと・歴史 ――』。

⑺　札幌市立信濃小学校開校百周年記念誌編集委員会編(1993)『札幌市立信濃小学校百周年記念誌』，札幌市立信濃小学校開校百周年記念事業協賛会，平成 5 年 12 月 1 日発行。

⑻　若林　功（1938)「農村史･創業の人びとを語る ―― 厚別開拓の父　河西由造 ――」(故河西由造小傳)『北海道農會報』，第 38 巻，第 453 号。

また，【「各府県移住民概況 5 ・長野県」『殖民公報』(北海道庁殖民部殖民課)，北海道協会支部，第 66 号，明治 45 年（1912） 5 月。(阿部敏夫氏提供)】には，

顕著なる移住者及び企業者（人：7 名，郡民・農場：5 件）

商業向井嘉兵衛　　札幌屈指の商店

商業逸見小右衛門　　函館の商店

札幌附近の諏訪郡民　　明治十年諏訪郡の民上島正なるもの札幌に移住し開墾に着手す同十四五年の交同郡の民数十戸団結して移住せしか率先者の詐偽に罹り遂に団結を解き各自民札幌附近に於て土地を購ひて土着し又其の内の一部は白石村字厚別に於て未開地を出願し水田を開き此処に新部落を成せり同地に信濃開墾地の名あるは之か為なり，要するに此移住民は着実業に従ひ概ね成功して現今屈指の農家となれり今其主なるものを左に挙けん

上島　正　　札幌区に於て著名なる花園業者なり其園を東皐園と称し牡丹，芍薬，花菖蒲，ベコニヤ，萩其他和洋花卉数十種を栽植又種苗を販買賀せり

武井総蔵　　札幌村で玉葱栽培。

宮坂坂蔵　　札幌区で果樹栽培。

藤森銀蔵　　圓山村で農業と園芸，長男：馬牧場，次男：牛牧場を十勝の國で経営。

河西由造　　移住の際は資力甚た乏しかりしか白石村字厚別に入り開墾に従事し今や水田 55 町歩畑 25 町歩を有し村内屈指の資産家となれり

⑼　玉川学園・玉川大学「石狩平野の米作り」：
(http://www.tamagawa.ac.jp/SISETU/kyouken/rice/ishikari/index.html)

⑽　長野県開拓自興会満州開拓史刊行会（1984)『長野県満州開拓史　総論』，東京法会出版㈱，昭和 59 年 3 月 31 日発行，pp.19-33。

⑾　高橋貞樹（2008)『被差別部落一千年史』，岩波文庫。
部落の数は，中部地方では，長野県が比較的多かった，とある。(p.187)

⑿　阿部　剛（2009)「北海道における徴兵制の展開 ―― 〝国民皆兵〞の虚実 ――」『新人文学』(北海学園大学大学院文学研究科誌)，第 6 号，pp.132-168。

⒀ 加藤秀俊（1976）『空間の社会学』，（中公叢書），中央公論社。
⒁ 上島正（1900）『想い出の記』，明治 33 年作成，全 38 頁。
⒂ 高島学校百年史刊行会編（1973）『高島学校百年史』，昭和 48 年 11 月発行（非売品）。
⒃ 杉浦幹雄「信州諏訪の生糸世界一の分布」：(http://www.tranzas.ne.jp/~smikio/suwa.html)
＊今日でも，信州の教育熱心は認められており，作家の司馬遼太郎もある講演会で「信州人は知的な感じがする。知的な尊敬を集めているのは，教育が盛んなせいですね」と述べている。（司馬遼太郎（1987）「言葉の文明」『司馬遼太郎全講演［３］1985-1988（Ⅰ）』，2011 年，朝日新聞出版，pp.325-339。）
⒄ 小平邦彦（2002）『ボクは算数しか出来なかった』，岩波現代文庫。
⒅ 石田梅岩（1739 年）『都鄙問答』（足立栗園校訂（1999），岩波文庫），pp.26-27。
⒆ 新渡戸稲造（1899）『武士道』（Bushido, the Soul of Japan.）
⒇ 坪内逍遙（2008）『当世書生気質』，岩波文庫。
㉑「龍馬の夢が芽吹く大地」『朝日新聞』，2010 年 1 月 1 日。
㉒「サライ・インタビュー　藤原正彦」『サライ』，2012 年 6 月号，pp.14-18。
㉓ 司馬遼太郎著『歴史を紀行する』（2010 年，文春文庫）の「あとがき」。